

1 株のイヌブナ

吉 江 清 朗

植物の種類とか分布生態について目を向けはじめたのは諏訪中学現諏訪清陵高校3年生(1930)頃からで飛田広教諭と地理学の三沢勝衛教諭そしてその上の牛山伝造先生で、飛田先生は霧ヶ峯の植物群落の調査をはじめられ、三沢先生は人間とその土地、その土地の由来から天文学の結びつきを、牛山先生は生物と人間の結びつきから地質鉱物特に諏訪湖の生物プランクトンに及ぶ。結局この3人の恩師による生物から地学に及ぶ総合教育を受けた事になる。その頃は霧ヶ峯・ハケ岳・諏訪神社社叢の植物に親しんだばかり、ブナ帯の中に居てブナを見る事なく、唯1本のイヌブナに接しただけである。此のブナは辰野町の辰野駅北側の王城山頂から塩嶺に通ずる尾根筋の通称水晶岩の下にある信玄の松並木にあった。王城山頂は武田信玄の狼火場として、南からは駒ヶ根市から僅か望見出来る。この松並木は下辰野区と唐木沢区の区有林の境界であり、水晶岩の下の方の下にどんな旱天つゞきでも水は絶えない。この水を濁すと夕立にあうというので雨乞いに使われたという。イタズラっ児群で夏休みにやって見たら見事下山中に雷雨にあった。その頃は水晶岩の名の通り石英岩の露頭で、苦労して岩を叩いて採った2cm位の水晶の標本は或は蔵の中にあるかも知れない。この泉の水の起源について別に書いてある(未了)。この松並木の上下は雑木林で、数年に1度は薪炭用に伐採され、問題のイヌブナは発見時は並木の間に伐痕から萌芽していた。この頃私の接し得たのはこの1本のイヌブナのみである。

1932年夏、林学の夏期実習で、熊本営林局の植生調査の手伝で、熊本県五箇荘の国見嶽のブナ林の精密調査を行い、次いで熊本・宮崎・大分県境の祖母山のブナ原生林の調査をした。その頃の熊本営林局の植生調査は植物の数の数えやすい所の然も所謂有用樹種を中心としての調査であって、私の求める植物生態調査には遠く及ばない原始的以前の調査であった。この事が余り良くない成績での卒業でありながら熊本営林局・国有林並に御料林より指名採用が学校に來た。之には勿論卒論の常緑広葉樹林の解析を試みた青井岳の植生調査(現在行われている植生調査と略々同様な)も影響していたと思う。若気の至りであんな調査をさせられるのではたまらんと、広く農業を学びたいので宮沢博士に従う事とした。

昭和8年(1933)より現宮崎大学林学科に学び、1935年は陸軍の大演習に際し現天皇陛下が行幸になるというので、その前から上片桐出身の宮沢文吾博士の宮崎県の植物調査をつづけていた資料集めに稗摺節の本據椎葉村から熊本県境の国見嶽の調査に入山した。之が宮崎県でのブナ原生林との二回目の出会いである。その後の宮崎県でのブナの原生林との出会いはササ類の密生する中が主であり、その周辺にはイヌブナが認められた。しかし生地の信州でのブナ林には遂に西駒と美が原で遠望するにとどまっている。富士山の釜無峡谷の奥では飛田先生は確認している。ブナ帯に居てブナを見ないナンセンス、近隣の山にもブナはある筈なのに、この町では川島の最奥の国有林でなければ見られぬのだろう。近くの山を知っている友人もまだブナもイヌブナも枝葉を持って来てくれない。ブナの森の歌は歌ってもブナは彼と彼女達には文学的存在でしかない。

山行の余裕もない生活を送り、その山行も出来なくなった現在、手元に残るのは戦後何年目かに訪れた水晶岩下での標本と数年前に久し振の茸取りの際に唯一の切株から弱い芽を吹いた一部を採集して來た1鉢である。しかし、その母株の下の方には薪炭材としてのベータ伐りとバラ炭焼がなくなった為か、どうも並木のイヌブナが結実したらしく、数本の5m余の若木がのびている。この峯つゞきの勝弦、川岸の辺迄歩いたが、遂にこの地区でのブナとイヌブナにはお目にかかれない。

現在採集して來たイヌブナは株を割り2鉢になっている。秩父古生層の露頭、フォッサマグナの南北に複雑に断ち切られた地帯でのたった1本、此のイヌブナは私のBotanical lifeに大きな記念碑となっている。そして、現在は辰野町荒神山スポーツ公園のある荒神山の各所に自生していたスズラン、周囲の山に無いのにこの山にだけ何故スズランがあったのか、開懸その他で失われたか現在はこの山にスズランはまだ見付けていない。唯亡姉或は次姉が現在の双葉高校生だった大正末年に、地域の小学校の各種の郷土研究の産物として教えられて採集して來た株が今も庭の一部に生育している。伊那谷の最北の天竜川畔の小丘陵産のスズランは何故私の知っている日本産スズラン中最も小輪で小数花しかつけないのか、地下茎も細い。